

乳井貢の実学思想と『陸稻記』

小 島 康 敬

はじめに

主善曰く、「乳井貢、財政を掌りて以来、専ら智術に任せ朝四暮三の法を行う。而して財を生むは大道にあるを知らざる也。是を以て其の為す所は賈豎（商人を馬鹿にした言い方——小島）の心計より出て省みず。術は尽き、計は窮す。倉廩は底を拂いて空。是に於いて標符を行い以て一時を済わんと欲す。其の終わりは敗を取る。固より宜なるかな」と。

（原漢文）*1

津輕藩藩校稽古館の助教を務めたことのある工藤主善（1818～1889）は、その著『津輕藩史』の中で、宝暦年間の津輕藩藩政改革推進の中心人物であった乳井貢（1712～1792）に筆誅を加えて、こう記した。主善によれば、乳井の財政改革は「大道」を踏みはずした小手先の「智術」にすぎず、失敗は当然の帰結であったというのである。宝暦改革における乳井の財政再建策やその他一連の行政改革案が具体的にどうであったのか、またどの程度の実効を見たのか、またそれらを歴史的にどう位置付け意義付けていくかという問題は、僅かの先行研究*2があるのみで、今なお十分に究明されているとは言い難い。更にはこれを当時の幕政改革や多くの藩で実施された諸改革と比較した場合、時代的共通項として何がくりだせるのか、あるいは逆に津輕藩に固有の地域的特色として何が摘出ができるのかという問題になると、研究は皆無に近い。これらの問題は今後進展せられていくべき研究課題である。毀誉褒貶相半ばした乳井の改革に対する歴史的評価はその実態が詳細に解明された上でなされるべきものであろう。

本稿はこのことに直接資しようとするものではない。小論の意図するところは、乳井の改革策の検討にあるのではなく、思想史的な視点からそういった改革推進の背後に控えている乳井の政治的信念なり理念はどうであったのかを考察することにある。すなわち、乳井をして政治改革に立ち向かわせしめた当のものを彼の意識内に立ち入って考え、またそれとあわせて、そういった改革を押し出さしめた土壌としての彼の実学思想の一端を『陸稻記』という著作に焦点を合わせて考

究していくことにある。乳井に関する歴史的評価の問題はこうした基礎的な作業の積み重ねの後に下されるべき事柄であろう。

1、宝暦改革直前の藩財政

乳井の経歴については前稿*3に譲るとして、先ずこれまで明らかとなっている宝暦改革直前の津軽藩の財政状態*4に関して、先行研究に依拠しつつ最小限度言及しておこう。

近世中期以降、諸藩において藩政の危機を打開すべく藩政改革が実施されたことは周知に属する。藩政の危機とは何か。直面する危機の実態は微細にみれば諸藩各々の事情によって様ではないが、結局のところ財政困窮の一言に尽きる。ではなぜ財政の窮乏を招来したのか。荻生徂徠（1666－1728）が『政談』で見事に分析してみせてくれたように*5、武士が「旅宿ノ境涯」に生きざるを得ないような幕藩体制の仕組みそのものに根本原因があった。参勤交代制、武士の城下集住の社会体制は必然的に商品貨幣経済の進展を促し、富は否応なく武士から離れ商人の元へと集積されていった。それでもなお17世紀、領主層が農業生産力の向上をあてにして新田開発によって石高の増加をはかったり、年貢収奪を強化して対応してゆけるうちはよかった。ところがそれらも自ずと限度があり、18世紀中頃になると頭打ちとなった。さらに言えば、元禄の末年頃に始まり享保年間以降顕著にみられてくる「米価安の諸色高」、すなわち米価の低落に連動せずに諸物価が逆に高騰する経済状況が現出されるにいたっては、貢租の増徴が必ずしも財政窮乏の補填には結びつかなかった*6。いきおい諸藩は「大モ小モ皆首ヲタレテ町人ニ無心ヲイヒ」*7で急場をしのがざるを得ず、借金による累積負債は増大の一途であった。宝暦期にいたると有力商人が藩財政の赤字を理由に藩への融資を拒否する例も珍しくなかった*8。領主側にとって事態はそれほど悪化していたのである。

宝暦改革前の津軽藩の経済状況に目を転じると、四代信政時代に積極的に新田開発が行われたが、元禄期には石高約29万7000石に増加し、ほぼ限界に達した。他方、江戸藩邸の出費は年々増加し、延享2年（1745）には大坂に廻米して換銀し、それを江戸に送る「上方よりの仕送金」も滞った。藩士の知行を借上げたり、貢米を担保にして上方・江戸・領内の有力商人から借財をしたりし

て、何とかこれを補うという逼迫状態であった。加えて津軽藩では寒冷地という地理的条件からくる冷害による度重なる凶作が藩財政の窮迫に一層の拍車をかけた。

『宝暦四甲戌年御改帳之写』*9には宝暦4年（1754）の時点での津軽藩の累積借財高が記されていて大変参考となる。それによれば、茨木屋、鴻池、佐藤など上方の特定の豪商からの借銀が1万4648貫295匁、江戸からの借金は4万2319両余り、国元からの借金とあわせて総計「三拾五、六万両之御借金」という巨額な額にのぼる。この借財高を20年あまり時期が下るが、乳井が記した『年穀多寡節用』*10に見られる安永6年（1777）度の藩財政収支の数値*11と比較すると、これがいかに膨大な負債額であるかが明瞭となる。安永6年は「豊熟」*12の年であったが、収入は米高が15万9081石、銀高が約1864貫87匁、金高が1860両であった。この総計を金に換算すると約20万両前後と概算される*13。ということは、かりにこの年の収入と宝暦4年の収入との間にさほど差がないものと想定すると、およそ宝暦4年の段階で実に藩の年間総収入の二倍弱に相当する負債をかかえていたことになる。乳井が勘定奉行に就任（宝暦3年）し、財政改革に着手しだした頃の津軽藩の財政状態は概ね以上のようなものであった。

では彼はどのような施策をもってこの財政危機に対処していったのか。凶作にあたっては領民の財産を残らず洗い出し、余裕のあるものから生活物資を強制的に供出させて再分配し、これまでの貸借関係を無効とし、領外への貸借は藩が代わって決済するなどして、飢饉を乗りきっていった。一、二の史料は乳井の果断な処置により宝暦5年（1755）の飢饉に際して津軽藩領内からは餓死者をひとりもださなかったことを伝えている。

同年（宝暦5年一小島註）凶荒に至候処、十一月在々余分有之者、家探之上有穀御取上、貧窮者ともへ救合せ、又五穀を自分にて、売買差止、大庄屋御運送方にて、村々余分有之者へ、売方申付、此凶作米百文に付式升七八合に、雑穀も是に準し、売せ候、隠し売ハ錢六十文に、米七合に有之、故に露頭の者ハ、追放申付、凡て米穀を以て拵出し候、食物停止に致し、夫故去る寛延二年の凶作に倍し候へども、乞食非人も多く出不申、餓死ハ一切相見へず候、毛内乳井の骨折一統賞美仕候。（『佐藤

家記』)*14

そして以下のような施策をもって藩財政の立て直しにあたった。

①行政組織の見直し。御調方を新設して行政機能や権力を一元化し強化した。②耕作地の調査整理。③通貨制度の統一と合理化。領内の金と銀との交換比率を江戸と同率に定め国内市場との統一をはかった。④商品経済機構への対応。領内産馬の移出禁止を解除し、また領内特産の丹土・硫黄・兼平石の採掘移出を振興し、増収を見込んだ。⑤士分取り立てを見返りとする商人の活用。商人から御用達金を徴収し、かわりに運送方の役人及び手伝いに任命して彼らを利用した。⑥「標符」（一種の藩札）の発行による経済統制。一商家一家業とし、一旦物資を上納させた上で家業別に再分配し、これを標符でもって売買せしめた*15。

これら諸策の内でも、最も注目されるのは標符発行による経済統制であろう。これは御用達町人足羽長十郎の献策によるものであったが、身分相応を前提としつつも生活物資・富の平均再分配化（「国量平分」）をはかるといふ彼の考えを反映するものであった。しかし標符を乱発しすぎたことによって、領内は経済的混乱に陥り、庶民の恨みを買ったり改革反対派の讒言にあって失脚し、5年間にわたる改革は失敗に終わったのである。

2、「武門天命の職」と実学

乳井の思想と行動を決定的に特色づけているのは武士としての強烈な職責意識である。

乳井は、人には誰しも「天」から命じられた「職」があり、この「天命職」を果たしていく責務がある、と言う。無論、ここでいう「職」とは、近代的な意味での「職業」をさすものではない。それは身分制を基礎とする社会の編成秩序の中で各人が占める位置（「分」）における役割といった意味あいである。従って当然のことながら、ある「職業」を自己の天命として選択するという契機はいささかもないし、そのことの前近代性をあげつらってみたところで、それは全く無意味である。士農工商には各々の職分があり、その職分を天命として受けとめ、それを果たす責務が各々にはある、と乳井は言うのである。

ところで、自分の「職」（社会的位置と役割）を「天命」として受けとめるべきだとの言説から、人は少なくとも相反する二つ生き方を導き出すことができよ

う。一方は人生に対する消極的受動的な処し方であり、他方は積極的能動的な処し方である。前者は、「天職」が運命的所与として観念され、それは甘受する他ないものという形で自己慰撫なり、諦めの論理として「天職」が語られ場合である。ここでは人はそれ以上を望まず「知足安分」たるべきことが「天職」の名のもとに合理化され納得せしめられる。後者は、「天職」が自己の果たすべき使命として観念され、更なる行為の発動を促す自己叱咤なり、激励の論理として「天職」が観念される場合である。ここでは「天職」への意識は人によい意味でのプロ意識の自覚を促す。そして確かに歴史的にみれば、「天職」の観念は「一方で職業に対する庶民の自覚を高めながらも、他方イデオロギー的には、被支配層の被差別感情を緩和させ、社会的上昇欲を抑止する役割を演じた」*16と言えよう。特に支配層が被支配層に向かって「天職」を強調する時には、この面が暗暗裏に意図されていた。しかし他面では、支配層が社会的エリートとして自らの行政的責務を自覚し、その責務の遂行を自らに厳しく課す論理として説かれることもあった。乳井が「武門天命の職」を問題とするのはまさしくこの意味においてである。

論が先走りすぎた。今しばらく乳井の言説にそくしながら、このことを見ていってみよう。

乳井によれば、「農」は農業生産物を産出し、「工」は手工業品を作りだし、「商」はそれらの物資を流通させるのが各々の「天命職」である。各々が職務に精励し、「功」（実績・成果）を立てるからこそ、社会は成り立つ。その報酬が「天禄」である。

農工商の三民は天命の職を尽し、年々功を終て天地の化育を助け、農は百穀を捧げ、上は天子より下は庶人に至るまで耕さずして食に足り以て生命を養ふ。是れ農夫の大功ならずや。工は家屋を修し器財を造り、上は天子より下は庶人に至るまで織らずして被、以て寒暑を凌ぎ作らずして器用に足る。是れ工人の大功ならずや。商は百物を運送し以て列国に通じ、千里を遠しとせず舟車和漢に運らし、上は天子より下は庶人に至るまで居ながら財を弁じ、歩まずして用を便す。是れ商人の大功也。此の職命の功を以て其値を得、父母妻子兄弟奴僕を養ふ。是を天禄と云はずや。（『志学幼弁』152-3頁）

このように「三民」は各々「天命の職」を尽くし、天地の化育に参与している。しかるに武士ひとり「職命の功微塵もなくして禄を得て」いるようでは、「民に養われると云ふ者」でしかない。そのようなことがあってはならない。「軍学弓馬刀鎗の秘術を極め巧手と成り、或は茶の湯俳諧香会」等の嗜みに通じてるをもって「武道に足れり」と心得る者もあるが、「是れ形は士人にして実は遊民」である。

それでは一体全体「士」とは何なのか。「武門天命の職」とは何なのか。乳井は「弓矢の道は君道を切り開き、君徳を三民に蒙らしめ、三民の功業を安からしめ、以て国家を富ましむ。是れ士の君に事て勤の的とする所也」（『志学幼弁』154頁）と言う。今風に言うならば、国家（＝藩）の治安と経済活動を含めた広い意味での国家行政に預かることが「武門天命の職」であるというのである。彼は武士をどこまでも行政官僚として捉えていこうとする。このような武士の存在規定には、彼が日頃「吾が素行夫子」（『五蟲論』全集第4巻315頁）と敬慕した山鹿素行の考え方が色濃く反映している。素行が、「士は不耕してくらい、不造して用い、不売買して利たる、その故何事ぞや」と徳川の泰平の世での武士の存在理由を問い、武士としての「身の職分」を知らねばならいとした上で、「三民の間苟くも人倫をみだらん輩をば速に罰して、以て天下に天倫の正しきを待つ」*17と、元来戦闘員であった武士を人倫の道德的師表として捉え直していったことは周知のことである。ただ、この素行と比較すると、素行は武士を人倫に道德的理想を実現する倫理的指導者として把握していこうとする傾向が強いが、乳井の場合はこの面もないわけではないが、それよりも「国家を富ましむ」という、より一層現実的な経世的観点から士の職分が説かれている、ことに注目しておきたい。時代はもはや武士が財政的知識に疎く経済的行為に恬淡であることを美德とするのを許さなくなってきたのである。

乳井が直面した現実はというと、前節で触れたように藩財政は完全に破綻し、累積負債額だけでも藩の一年間分の総収入をはるかに越えた。津軽地方は周期的にやって来る冷害に絶えず悩まされたが、宝暦5年の異常気象による東北一帯を襲った大凶作は領内に壊滅的な打撃を与えた。同年津軽藩より幕府へ提出した届書には「損毛の覚、高四万七千石の内三万四千二百八十石、他に新田高十九万六千三百五十三石五斗二升の内十六万千三百三十石余」とある*18。平年の約二割しか

収獲できなかった。当然大飢饉が予想された。

こうした津輕藩の当時の現状を念頭において、以下の『志学幼弁』での乳井の発言を読むと甚だリアリティーが増してくる。『志学幼弁』は宝暦改革挫折後の謹慎処分中に著されたものではある*19が、改革に臨んだ乳井の胸中を推し量ることができる。

今の人臣は務めを知らず。務めを知らざるゆへに心は忠を思へども見ながら国家の困究を救ふこと能はず。（『志学幼弁』285頁）

国家の窮乱に及ぶは群臣の務めを知らざるゆへ也。己れの務を知らずして国家既に窮乱に及ぶ時、其罪を君の不明に帰す。而して国家の窮乱を見物して己れ一人を全ふし、是を君子の道也と思ふ、是れ迷ひの甚にあらざるや。（『志学幼弁』285頁）

乳井に政治的野心や功名心がなかったわけではないであろう。しかし彼をして宝暦改革断行へと突き動かしていた根本的動機は、自分が「武門天命の職」にあることの意味を自覚したところから来る責任意識であった、と言える。彼は、「国家窮乱」の政治的現実から目をそむけ、何事も「無事安穩」をとひきこもり自己一身の安逸を願う事なかれ主義的な生き方を、武士の「職分」を忘れてたものとして最も嫌悪したのである。失敗を恐れずに我こそはと「危難」に立ち向かう「英気」（『志学幼弁』110頁）を持たず、責任を問われることを恐れて小心翼翼と「命ぜられたる職役を格式に合せるのみ」（『五蟲論』全集第4巻338頁）の生き方を唾棄した。彼の目に映じた当節の武士は「遜讓」を楯に保身をはかるだけの余りに志しの低いものでしかなかった。彼は言う。

孫(??)讓だに固く守れば善きことゝばかり覺て、君憂へ国危きを見るといへども進み出て是を救はんと励む心もなく、世を憂べきの志もなく、危き所をば人に譲り、難き所をば事を辞し、若し君命を官職に与れば、不肖愚昧を云て何ごとも人の後に従ひ、唯だ己れ一身を大事として、曾て国家の危亡を大事とせず。是を以て聖教孫(??)讓の至と慎む。其慎み積て君と国との大難に及ぶことを弁ず。（『志学幼弁』293頁）

ところで興味深いことは、乳井がこのような小役人的風儀を醸し出した元凶を「朱程の心法」の学に求めていることである。彼は朱子学を徹底的に批判しているが、その要点は朱子学では「心法」論（心の修養）のみに関心が向けられ、経

世致用がおざなりとなり、その結果「学」と「治道」が懸隔してしまったという点にある。彼は言う。

宋儒始て心法心術心理の学を立、一切の聖語を悉く心上に引き著て工夫の一段とす。学爰に於て始めて治道と扞格して今日と分離するに至る。
(『志学幼弁』243頁)

乳井によれば、儒教は元来天下国家を統治する為の学であって、個々人の道徳的な心の在り方に係わる学問ではなかった。それなのに「経済を棄て国家の急を救はず、日夜心上理学に修行を委ぬる」(『志学幼弁』213頁)者が多いのは「朱子が腰抜け学問」(『五蟲論』333頁)に惑わされたからに他ならない、と言うのである。朱子学に政治論がなかったかと言えば、事實はそうではないであろう。『大学』の八条目にあるように、朱子学の最終課題は「治国・平天下」にあった。しかし朱子学では個々人の道徳的自己完成(「修身」)が実現すれば自ずと国家の統治(「治国・平天下」)も実現すると考えられ、「修身」が「治国・平天下」に先立つ実践課題とされる。乳井は、朱子学のこの考え方こそが目前の経済的政治的課題から身をかわし、事を先送りにする恰好の逃げ口上になっていると見て、その点を厳しく糾弾していく。彼は言う。『大学』では「理を窮め」「身を修め」、「而して後に」「天下治平」の事にかかれというのが、大体いつになったら「身が修まる」というのか、また「修身」が「治国」の前提条件であると言うのなら、未だ身が修まっていないうちは「今日唯今究(窮)民ノ乱」もそのままに差し置いておけとでもいうのか(『志学幼弁』161頁)、と。

乳井のこの『大学』解釈には疑問の余地がないわけではないが*20、朱子学のあの面での迂遠さが見事に暴露されていると言えよう。明日を待たず、今、このこの「事」に全力を注げ、と乳井は幾度も主張する。このような逡巡躊躇することなく「今」を踏み出せといった彼の主張は、一時期にせよ藩政を実際に主導した体験に由来するものと考えられよう。なぜなら飢饉に喘ぐ「究(窮)民」の惨状を目の前にして、猶予は一刻も許されなかったであろうからである。

「世乱れ民窮すれども一人志を經濟に嘆く学者なし。哀むべきの至り也。」
(『志学幼弁』281頁)と嘆く乳井にしてみれば、学問は「国家の用に立つ」べきものでなければならなかった(『志学幼弁』231頁)。乳井は国家有用の学問を素行にならって「聖学」と呼び、「実学」という言葉こそあまり使ってい

ないが、その内容は明らかに実用と実践を重んじた「実学」であった。彼が残した著述の多くは今の範疇でいえば、政治学、経済学、実用数学、測量学、農学に相当し、いずれも「実用」を主とするものであった。何事も「用を実として学べし」（『志学幼弁』171頁）と乳井は言う。

彼には真理を行動と実用の見地から捉えてゆこうとする自覚的な考え方があり、プラグマティズムの思想に通ずるものがある。彼は内省よりも実践を重んじた。そしてその実践における真理は実際的な生活に役立つか否かによって検証され決定される、と考えた。従ってはじめから固定した原理や絶対的な真理があるわけではない。同じ行為でもその時々状況によって持つ意味合いがことになってくる。また状況が変わればこれまででとされた基準が無効となり、新たな対応を迫られることは往々にしてある。従って「時の一字」（『志学幼弁』84頁）を知り、旧例にならず臨機応変に現実への有効性を指標として判断行為していくことが国家経営の任にあたる者には求められる。「士」「学者」とはまさしくその任に与かるものではなかったのか。しかるに「今の学者は礼経の文言文字の訓詁のみを学び、敢て治国の大用に施すことを志さず。故に学者国家の事に与れども其務る所を知らず。其の執る所を知らず。いかんともすること能はずして止む也」（『志学幼弁』391頁）。「先王孔孟」を学ぶのではない。「先王孔孟」に学ぶのである。『六経』は「道の跡」、いわば「糟粕死物」であり、「道」そのものではない。「先王孔孟」が求めたところのものを汲み取り、それを「今日唯今」に役立てるのが「学者」の務めである。古典はそれ自体に価値があるわけではない。それに意味を付与して価値をあらしめていくのは「今日」の「吾」である。「死したる孔孟を貴びて国家何の益かある」。大事なものは「孔孟」を「今日」に用立てる「吾」の裁量である。次の引用は乳井のこの考えが鮮やかに示されている。

今日と吾れとを棄て国家に用ひざるは何事ぞや。今日の吾れを以て孔孟の伝言を国家に用てこそ、誠に孔子孟子を貴び用ると云者也。（263頁）

以上見てきたような彼の実学観、実用へ志向、古典的權威の重圧から解放されて自在に古典を用具として使いこなしていく強烈な「吾」意識の主張などは、乳井より約40年ほど後に生まれた経世家海保青陵（1755—1817）の主張

と見事なまでに一致し*21、これは思想史上先駆的な意義を有したものと言えよう。18世紀後半、人々はもはや儒教的真理ではなく、真理一般を求めだしたのである。

さてそれでは次に節をあらため、彼の著『陸稲記』を考察の対象として取り上げよう。というのも『陸稲記』はまさしく乳井自ら「其实用を試み」（177頁）た結果の貴重な記録であると考えられ、興味深いものがあるからである。

3、『陸稲記』

「聖学の用は田を耕し穀を収めて井を鑿り水を求めるが如きの事務なり」（『志学幼弁』301頁）と彼は言う。言うまでもなく、ここで言う「事務」とは今で言うデスクワークを指すわけではない。空論に対して実際の事柄に務めるという意味での「事務」であり、いわば実務の意味である。「聖学」は「田を耕し穀を収めて井を鑿り水を求めるが如きの事務」であるという言い回しは単に比喩としての表現ではなく、文字どおり「田を耕し穀を収める」ことは「聖学」の内に属するものとして捉えられていた、と解したい。彼にとって学問とは天下国家に実益をもたらすものでなければならなかった。それ故、農業や土木、測量学、実用数学が「聖学」の一環として彼の学問領域の射程に入ってくるのはごく自然のことであり、事実彼はこれらに関する少なからざる著述を残しており*22、『陸稲記』もそれらの内のひとつと言える。

『陸稲記』は、乳井61歳の時、明和9年（1772）に著された。この年は事件、災害が続出した年であった。江戸では目黒行人坂の大火で優に万を越える死傷者を出し、東北地方では冷害が発生し、また各地で洪水が起こった。この年、「明和九」（メイワ）な年との語呂の悪さを嫌って「安永」（ヤスカガシ）と改元された。

『陸稲記』は書名にある通り陸稲を奨励したものである。陸稲とは「畠稲」とも「旱稲」ともいい、畑に植える稲である。宮崎安貞の『農業全書』（1696年成稿）によれば「水田にしては水乏しく、又畠にしては湿気ありて、両様ともに宜しからざる地にうゆれば、水稻に勝りて実りある物なり」*23という。乳井はどうしてこの陸稲を奨励したのであろうか、また『陸稲記』から我々は乳井のどのような考え方を引き出すことができるのであろうか。以下、『陸稲記』の内容を要約しながら分析を加えていこう。

「種芸」を貴ぶことは「吾神教」の最も重んじることであり、わが国のみならず、中国の「先王」の教えもまたそうであった。「生を養ひ民を利し国を富まし財を足すの源」は「種芸」を措いて他にはない。ところで、これには「庸人の種芸」と「君子の種芸」の二つがある。前者は自分ひとりの利を謀り、目前の功利にはしるものであり、その結果百年後には四海困窮する。後者は国家全体の利益を謀るものであり、目前の利には疎いが百年後には山は栄え田畑は開け国は富む。「土」は全ての根源であり、「万宝千財」みな「土」より出さずというものはない。従って、目前の財費をおしんで「財利」の根を絶つことは愚の至りである。「種芸の道」は「民を蓄ふの大本」である。「種芸」の為に「財を散じること土塊の如くし、土塊を吝むこと財の如く」するとき、民が集まって「民業」が進む。「民業」が活性化すれば国土は開けてくる。これに反して財を吝んで「種芸の道」を軽んじれば、山林田土は荒廃する。ゆえに「種芸の道は国土を辟き四海を富まし財利を足すの源」（『陸稲記』全集第3巻215頁）である。

五穀の中で「稲」より重要なものはない。天下の盗みは「利欲」より生じ、「利欲の乱」は畢竟は五穀の不足から起こる。衣食足りてこそ榮辱を知るのである。だから管仲も「民貧なれば家を軽んず、民家を軽んずれば法を犯す、法を犯すときは治めがたし、民富むときは家を重んず、民家を重んずるときは上を恐る、民、上を恐るときは治め安し」（『管子』牧民）と言ひ、孔子も「既に庶あり、先づ富さん」（『論語』子路）、「政は民をして富ましむるより先なるはなし」（『論語』顔淵）と言っているではないか。人が生命を養うに「食」が必要であり、「食」の中心は「五穀」にあり、「五穀」は「農耕」により生産され、「農耕」には「田土」が不可欠である。「田土」は「君」の有するものである。「土」を開くのは「君」であり、「土」を開くこと大であれば「五穀」を得ることもまた「大」である。「五穀」が満ちれば「民」が集まり、民が集まれば自ずと「金玉財宝」も満ちる。これを「君徳」というのである。「徳」は本であり、「財」は「末」である。ところが本末を転倒して財を本と心得、田土が荒れても修理の為の財費を吝むから国土は疲弊するのである。「土を貴ぶこと神の如く、穀を貴ぶこと君の如く、財を賤んずること塊の如く、利を賤んずること埃の如くして一月是を行へば、国家の財政上に帰せずと云ことなし」（『陸稲記』218頁）

以上の要約から先ずうかがえることは、乳井が立国の基本を農業に置いている

という点である。ここで展開されている主張は、端的に言えば、貴穀賤金主義の立場と言えよう。乳井は交易による利潤獲得の手だてを現実的な政策として採用するものの、それ以上に農業生産活動こそが何にもまして富国の大本であると考えてるのであり、その基盤整備の為の投資を惜しむなというのである。海保青陵は、日本全体が自給自足的な自然経済機構の段階から商品経済機構を前提とした経済競争社会の段階になっているこの現実を冷徹に見据え、農業生産過程の中で富を蓄積することに見切りをつけ、藩自らが「産物回し」という形で「他国の金を吸取る」べく商業活動に乗りだして流通過程の中で富の獲得をはかるべきことを力説した。乳井は先に言及したように、領内産馬の移出を解除し、丹土・兼平石など特産品の移出を振興するなど商品経済機構に対応する政策を打ち出しており、商品経済の現実を決して無視するわけではないが、青陵ほど徹底して競争経済社会への積極的適応を是認しているわけではなかった。乳井は、「商」は財利を通じて、天下の「大用」に貢献するのがその職分であり、今の商家が諸大名に用金を貸して利をむさぼるのは「商家の職分を忘れた」「盗人」の仕儀である（『商家利道』*24）として批判している点にも、彼の商人観を垣間みる事が出来る*25。彼はどこまでも農業生産物を諸活動の基本と考え、その生産基盤である田土の開発に目を向けるのである。ただし田土の開発といっても、彼は無制限な計画性のない開発は認めない。「夫れ徒に田土を辟くを善として、其制すべき道を知らざるときは節用を統ず」（『陸稻記』228頁）というように税法田制の確立を前提とした上での計画的な節度ある開発であった。『陸稻記』には耕地の整然とした区画図と税率や耕地面積の細かな数値が割り出されており興味深い。

このように立国の基本が農業にあることを説いた後、乳井は「陸稻」の栽培を奨励するのであるが、その論旨を更に追っていこう。自分は「孔門」の学を信じて四十余年、既に六十に及ぶというが、いまなお「思ひ」を「経済」にめぐらすことしきりである。何を「思ふ」のか。いわく、「三思あり」。「一に曰く種芸、二に曰く通財、三に曰く国定、是也」（『陸稻記』221頁）。これら三つのものの「微」に通曉し実行に移そうとしたが、遺憾ながら「通財」と「国定」は途中で「位を退けられ」効果のほどを見ることができなかった。しかし「種芸の道」は「其の驗」をみた。「民の益」を求めるのに「種芸の利」より大なるものはない。種芸のうち「五穀の利」より大なるものはない。五穀のうち「稻の徳」

より大なるものはない。しかし稲は千里の野があるとしても水のないところでは作ることができない。又収穫まで余りに多くの手間がかかる。さらに毎年水旱の憂いも伴う。そこで自分は思いをめぐらして水稻の種を陸に植え栽培してみたところ、生育から結実まで水稻と毫も差がなかった。もし水稻が陸稲に変異したのなら、まさに人が翼を得た如く、「山に種うへし、野に種うへし、且つ旱魃水溢溝恤堤防の憂なく、国土を開き食糧を足し、利沢万世に及んで」境なく、一国の益のみならず全国の民を救うことになる（『陸稲記』224頁）。そこでその年に収穫のあった種を翌年に植えたところ、前年と同じ結果をみた。これより持ち伝えることすでに「星霜十年」の間、「年の寒暑稲の豊凶を考へ種法を試み」てきた。これを人にも教え役人にも勧めたが、誰も真に受けようとはしなかった。それはなぜか。彼は言う。

今や列国の諸侯皆財利を重んじて耕作を軽んず。焉くんぞ吾が言に従ふ者あらん。（『陸稲記』227頁）

それでもなお百年の後に知己を得んとの思いでこれを筆記するのである。そして以下、彼の実験の経験に基づいて、耕地の規模や形、播種の方法、作付けの方角等々の栽培技術に関する知見が詳細に披瀝されるのである。それらの技術的知見のひとつひとつをここで紹介し、それらの客観的妥当性を検証するのはこの場では適切ではないし、またその力は私にはない。ただ、ここで強調しておきたいことは、これらの農業技術に関する知識情報が何かの文献を典拠にして敷衍されたというのではなく、「吾十年の間稲を四壁の中に栽て之を試ること」（253頁）云々と述べているように、どこまでも彼の実地での経験が基となって記述されている、という点である。彼は机上の空理空論を徹底的に排した実践家であった。彼は土分の身であったが、実際農業土木に携わり、治水、灌漑、土壤、肥料等に関する知識や経験も豊富であったことが推測される。それは晩年、川原平に流謫されたとき、土地の人々に水田耕作を教え感謝されたという、次の記述からもうかがえる。

貢つらつら山谷の模様を実見し、一の山を穿ち通して、用水を導き、是より数町之田地を開き、村人初て耕耘し米を食する事を得たり、此用水を長く引て隣砂子瀬村にも田地を開墾せり。（『工藤喜右衛門筆記』*26）

寡聞にして断言はできないが、陸稲の奨励は、そのことの妥当性はともかくとして、近世に多く書かれた農書の中でも余り類をみないものと思われる。『農業全書』では、陸稲は作りようによっては「思いひの外相応して水稻の利分におとらざる事もあるなり」*27という程度に奨められてはいるが、それほど強く奨励されているわけではない。

津軽地方の農書としては、安永5年（1776）年に田舎館組堂野前村の中村喜時が著した『耕作嚆』がよく知られている。中村は稲作一筋に生きた豪農であり*28、著作中の「土地は虚言を申さずとは古往よりの伝えなり、手拔骨抜きせし事まで鏡で形を見る如く作体をあらはし、全く隠され不申候、此故に田甫を見らるゝことは耻かしきものに候」*29という言葉は、いかにも耕作者としての生涯を一筋に歩んできた人にふさわしい千鈞の重みを持つ。この書で中村は宮崎安貞の『農業全書』（1696年成稿）を参考としつつも、一般論で括ることのできない「所々の風土」を充分に勘案すべきことを力説している。そして「農家に於て土地相応の種物撰む事大切なり、御国の風土は秋早き作物は利多く、秋遅き作物は損多し」との認識の下、津軽地方ではとりわけ冷害への対応上、気候風土にかなった早稲品種を選択するのが得策である、としている。しかしここでは陸稲への記述はない。

時代は半世紀ほど下るが、農政家佐藤信淵（1769－1850）はその著『草木六部耕種法』（天保3年序（1832））で陸稲耕作に着目している。信淵は、水田耕作は干ばつや暴風雨等によるリスクを伴うものであるから、「国家に主たる者は、早稲を作る法をも講明せずんばあるべからず」と考え、「早稲」を「耕種すること五、六年」に及んだが、肥料培養に意を尽くせば、収穫率も高く「国家の宝」ともなり得ると思い、門人であった韭山の代官江川太郎左衛門に「此の稲を下地して多く作らしめば、必ず国家の利益ならんと」と推奨している。しかし江川の答には「米の性悪糲して御年貢に収め難し」ということで受け入れられなかった*30。確かに年貢を収奪する側にすれば商品性の高い作物が都合のよいのは当然で、陸稲は年貢の対象には不向きなものであったに違いない。しかし天災で飢饉ともなれば、最も悲惨な目にあうのは農民達であり、彼らの生命を維持して行く上で商品生産物としての価値はなくとも天災に強い陸稲が作付けされねばならない、と信淵は考えたのである。乳井の『陸稲記』に示される関心や知見は

このような佐藤信淵の農政学につながっていく面があったと言えよう。

以上、不十分ながら、藩財政の窮乏という現実を前にして、武門の生まれとしての強烈な職責意識のもとに、学問をどこまでも経世済民の為の実践的武器として活用していかんとした乳井の実学思想を見てきた。『陸稲記』という著作はそのような彼の思想のひとつの成果である。ところで、彼には『深山惣次』*31という実に滑稽な著作がある。これは二度にわたる政治的挫折という苦渋を味わった後の最晩年に著された奇想天外な戯作である。この作品は戯作文学としても完成度が高く甚だ興味深いが、最晩年の彼の心中が吐露されていると考えてよい。

「深山」というのは彼が流謫された西目屋川原平の幽谷の地をさし、「惣次」は「莊子」のもじりである*32。惣次は「苦界の世界を嫌ひ」人里遠く離れた山中の洞穴で「五穀を絶て木実草菓を集めて五臓を養ひ」、「無禪」で「人間の制を用ひずして」暮らしている。そのことを伝え聞いた「名は久兵衛、字は忠次と云人」（名は丘、字は仲尼の孔子のもじり）が大いに腹を立て、これは「世を盗むいたづらもの」である、人には「人の中」で果たすべき「天命」があることを説諭して諫めずんばあらず、と惣次の穴居に訪れてきて問答をかわすのである。その忠次を前にして惣次は「人の恩を受けず心安き天地の恩を恩とす」る人生哲学を語る。果たしてここに至って乳井はこれまで執拗に主張してきた「実用」の立場をかなぐり捨ててしまったのであろうか。乳井最晩年の屈折し一層深みを増した思想の考察、それは今後の課題である。

注

*『志学幼弁』『陸稲記』等の乳井貢の著作からの引用は便宜的に『乳井貢全集』（全4巻 乳井貢顕彰会発行）に依拠した。句読点・濁点を適宜施し、また旧字体は新字体に変え、送り仮名を片仮名から平仮名に変えた。本全集は遺憾ながら誤植が余りに多く、このままでは文意の全く通らないところも少なくない。従って弘前市立図書館所蔵の自筆本及び写本により確認し、誤植と判断される部分は校訂して引用した。ただし便宜上引用箇所の頁数を全集本により本文中に組み入れて示した。

／

*1『津軽藩史』巻4 明治24年1月刊。

*2管見に及んだ論考に以下のものがある。

野村兼太郎「乳井貢」、『徳川時代の経済思想』所収（日本評論社 1939年）

宮本真澄「乳井貢の経済思想について」、『弘前大学国史研究』24号 1960年。

大川哲夫「津軽藩に於ける宝暦改革の一考察」、『弘前大学国史研究』30号 1962年。

宮崎道生「津軽藩宝暦改革の思想的背景」、『地方史研究』78号 1965年。後に『青森県の歴史と文化』（津軽書房 1977年）に収録。

浅倉有子「津軽藩宝暦改革の諸段階と特質」、『歴史学研究』月報 237号。

*3拙稿「津軽藩士乳井貢の思想——その基礎的考察——」、長谷川成一編『北奥地域史の研究』所収（名著出版 1988年）

*4工藤睦男「宝暦改革前における弘前藩の財政事情——宝暦四年の借財高をめぐ——考察」（『弘前大学教育学部紀要』第9号 1962年）を参照。

*5『政談』巻之1、岩波日本思想大系『荻生徂徠』 295－6頁。

*6吉永 昭『近世の専売制度』（吉川弘文館 1973年） 216頁。

*7太宰春台『経済録』巻6 享保14年刊、『日本経済大典』9巻（明治文献 1967年） 512頁。

*8吉永 昭『近世の専売制度』（吉川弘文館 1973年） 216頁。

*9弘前市立図書館岩見文庫蔵。なお注4の工藤論文ではこの資料の数値が一覧表化されており借財状況が明らかにされている。

*10『乳井貢全集』第3巻（乳井貢顕彰会 1936年） 269－289頁。

*11注4の工藤論文及び浅倉有子「蝦夷地警衛と藩財政」（『国史研究』90号 1991年）には『年穀多寡節用』をもとにした収支一覧表が作成されている。

*12『佐藤家記』、みちのく双書『津軽藩歴代記類』（青森県文化財保護協会 1959年）225頁

*13注4工藤論文 20頁。

*14みちのく双書『津軽藩歴代記類』（青森県文化財保護協会 1959年）229頁。

*15乳井が財政改革の切り札として「標符」を発行した思想的背景には、貨幣は元来それ自体に実体的価値があるわけではなく、商品交換に便利であるが故に通用されるまでのことであり、とすればそれを徹底させて「今金銭を止め紙板に印して用るとも亦可也」（『志学幼弁』301頁）という貨幣観があった。

*16平石直昭「近世日本の〈職業〉観」、東京大学社会科学研究所編『現代社会』4（東京大学出版会 1991年）所収 65頁。

*17『山鹿語類』巻21「士道」、岩波日本思想大系『山鹿素行』 31頁。

*18『弘前市史』藩政編 766頁。

*19従って意地悪く言えば『志学幼弁』は自己を合理化正当化するための弁明の書という見方もできなくはないが、この書には武士としてのたぎりたつような使命観が横溢しており、その使命を完遂することなく政治的挫折へと追い込まれた憤懣や思いの丈が綴られていると見るべきであろう。

*20乳井は『大学』の「格物」から「平天下」までの八条目の関係を論理的前後関係ではなく、時間的前後関係を意味するものと解するが、これが正しい解釈か否かは疑問が残ろう。

*21海保青陵に関しては拙著『徂徠学と反徂徠』（ぺりかん社 1987年）の第三論稿を参照されたい。

*22『制地考』1巻、『検地法』1巻、『城制法』1巻、『城制規矩』1巻、『町見術』3巻、『円術真法円伝』1巻、『観中算用』1巻、『初学算法』1巻、等々がある。

*23宮崎安貞『農業全書』 岩波文庫 95頁。

*24『乳井貢全集』第2巻 308頁。

*25彼の商業観についてはそれだけで別に論稿を準備べき課題と思われるが、基本的には藩が「商家に利権を奪われざる制」（『国家財政』、『乳井貢全集』第2巻 272頁）を建て、藩が米相場において価格調整の主導権を握って、経済活動の利権を藩の統制化に置こうとするものであった。

*26『津軽藩旧記伝類』（国書刊行会 1982年） 238頁。

*27同前 96頁。

*28中村家については、工藤睦男「『耕作噺』の著者中村喜作と生家中村家について」が詳しい。弘前大学教育学部紀要16-A 1966年。

*29「耕作噺」『近世地方経済史料』第2巻（1932年） 33四頁。

*30『佐藤信淵家学全集』下巻（岩波書店 1927年） 269-275頁。

*31『乳井貢全集』第四巻（乳井貢顕彰会 1937年）

*32『深山惣次』という作品は『田舎莊子』『都莊子』等々の江戸時代中期以降流行した談義本との関連で捉える必要がある。老莊をもじった多くの談義本の出版については中野三敏「近世中期に於ける老莊思想の流行」（『戯作研究』中央公論社 1981年）が参考となる。